

## 障害小児をもつ母親の育児意識

瀬谷美子（神奈川県立衛生短大・東京学芸大）

井上義朗（東京学芸大）

### 〔目的〕

障害をもつ子どもの母親と、障害をもたない子どもの母親の育児意識や育児観などを調査し、青年の親準備教育との関連のなかに生かしていきたい。

### 〔方法〕

調査時間：昭和60年11月～12月

対象は板橋区の心身障害児総合医療療育センターに通院する、障害児をもつ母親150名に郵送によるアンケート調査を実施した。回答数は62名で回収率は41%であった。

なお、新宿区の4保健所において障害をもたない3歳児の母親200名に対し、2月から3月にかけて同様のアンケート調査を実施し比較検討することにした。

### 〔結果〕

#### A 対象の属性

1. 母親の年齢	26歳～30歳	6(9.7%)
	31歳～35歳	38(61.3%)
	36歳以上	18(29.0%)
2. 子ども数	1人	18(29.0%)
	2人	33(53.2%)
	3人	10(16.2%)
	4人	1(1.6%)

障害児の年齢は4歳から5歳を中心に選んでいる。出生順は表1に示す如くで第1子が5割以上である。

#### B 診断

我が児が障害をもつ児であることの認識の有無は、児の理解に関係深く、育児観、育児意識の形成に影響をおよぼすものとして重要な要素と考える。

診断名を告げられた時期は、表2に示される如くで、1歳までに告げられている者が74%と

早期である。診断名の告げられ方について求めた所、特に意見はないと回答した者が58%、もっとはやく、はっきりとした診断名を告げて欲しかったと回答した者30.6%であった。なお、自由記載により診断名の告げられ方についての意見を求めたが、注目すべきこととして、特に意見はないと回答した者の中にも早期の告知を望む意見が多く見られたことである。具体的内容として、速やかな専門施設への紹介、親のちょっとした異常への気づきに医師は耳を傾けて欲しい等、医療者側への要望があげられていた。また、自らの学習が早期発見と診断への理解、納得につながったという意見もみられ、これらは受胎前育児の構えに対する教育と深く関連するものと考えられる。

なお、今回の調査において障害に関する知識の習得法に対する回答を求めたが、講義で学んだ者は6名に過ぎず、今までに得た大学生の回答との比較において低率であった。

#### C 育児観 育児意識 育児行動

育児とはどういうものかについて世話をする、遊ばせる、しつけるの三項目をあげ選択を求めた結果は、世話をする、遊ばせるがほぼ同数であり、しつけるは小数の者であった。

表3は母親が日常生活の中でとらえている児の様子を示したものである。健康状態に関して全然良くないと答えた3名および全然ほほえまないと答えた1名は気になるが、他の殆んどの子は健康的な状態にあるといえる。このことは、母親が育児するためにはおおむね満足できる状態といえ、母親自身の育児の成果としての満足感と受けとることもできよう。

子どもの成長・発達を期待する母親の気持ちは当然であり、また、育児意識、行動への関連

も深いものと考え。全く個別であろう障害をもつ児の成長を母親はどのようなところからとらえるのであろうか。表4は重複回答で得た上位七項目を表わしたものであるが上位3までの項目は同数の回答であった。

表5は母親の挙げる育児の目標である。九項目を設定し三項目の選択によったものであるが、「子どもの毎日が幸せであるように、」と、「健康維持」が上位であった。4名ではあるが「とにかく生きていて欲しい」をあげた母親の存在をとらえておきたい。この結果を障害児を育児する者の特徴と安易にとらえてよいものか。健常児の母親の回答との比較において読み取るべき内容と考えたい。なお、先に述べた成長のとらえ方についても同様に考える。

#### <母親のとらえる母子相互の関係>

母親の意識に基づく母子相互の関係を、児が母親を他人と区別し得た時期と母親が児を可愛いと実感した時期との関連でみようとしたのが表6の1である。ここに示される如く、時期はおおよそ一致していることがわかるが、双方の照合を個人別に試み分析した結果、過半数の母親は、児が母親を区別することのできない時期から既に可愛いと実感している。このことを含めて表6から得られたものは今回の対象である母親の場合、子どもに対して可愛いと実感したのはかなり早期に確立されているという結果である。

表6の2は児が母親と他人を区別できたと母親が気づいた時期とその時の児の様子を自由記載で求めたその結果を表したものである。機能の障害の部位、程度、精神発達遅滞の程度との関連で分析を試みたが、上記の児の条件はあくまでも母親の認識によるものによった為もあり考察は不可能であったが重要なものと考えられる。

表7,8は母親のとらえる母子相互の関係、精神交流である。児に伝わっていないと回答した1名およびわからないと回答した10名は、いずれも障害の程度の高い児の母親であった。精神交流が感じとれた時期には3ヶ月～4ヶ月、1歳～2

歳まで、3歳～4歳までとピークがみられている。自由記述によるその内容は様々であったが、親が怒ると泣き、可愛がると喜ぶ、親がイライラすると子どもも寝ない、親の感情に反応する、何となく顔を見て、等であり、その他いずれにしても親の気持ちそのものが、児の中に、児の気持ちとして感じとられるという、まさに山びこの呼応状況の感があり、このことから母親は相互の精神交流は成立している意識に立っているものの母親の主観が強いと思われるので、やや信憑性に欠けるものと課題は残されている。しかし、75%もの母親が精神交流の成立を意識して育児にあたっていることは意義深く、大切な状況といえよう。

児が現在(今)一番して欲しいことと、母親が児に一番してあげたいことを自由記載で求めた内容を整理したものが表9である。

児が一番して欲しいことは、一緒に遊んで欲しいことであるとして推し測ってはいるものの、母親は機能障害の程度を少しでも進展させてあげたい思いが先行していることが明らかである。なお、「心良い気持ちに」と要約したその内容の一部をあげると、児の要望として、気持ちを理解して欲しい、思い切り甘えたい、やさしくして欲しい、安心したい等であった。母親としては、児の気持ちを汲んであげたい、家族みんなが貴女を好き、力一杯抱きしめて、笑い声を出せるような状況にしてあげたい等であった。その他、様々あげられた表現の中に、母親は、子どもは母親自身を必要としているという意識を深くよみとることができた。

育児行動の面から①育児上の負担、②求める援助の内容をみたが、昭和56年度厚生省家庭児童局における心身障害児の実態調査結果とほぼ類似していたが、①、②の双方に夫に対する期待がみられていた。このことはとらえておくべき一特徴であった。

障害児の受け入れに対する一態度として、胎児診断のチェックに対する積極性の有無をみたのが表10である。先に対象とした大学生の結果

とほぼ同じであった。

表11は障害児が出生した場合の養育姿勢の一面としてみたものであるが、障害児をもつ母親の場合、障害児の出現前よりも、出現後に自分の手もとで育てたい意識が高まっていることがわかる。それは育児の体験が影響し、自分でも養育できるという自信につながっての結果でもあらうと推察する。

以上は障害をもつ児の母親を対象とした結果のみを分析したものである。

母子関係の成立を特に障害児を対象に考える時、援助にあたる私共は、分娩時の母子対面と外表奇形をもつ児の母子に対する判断、配慮、また、児を即時他の該当施設へ転院させた場合の母子の関係を如何に保持するか等の研究課題に努力を続けているが、一方、親準備の立場から、今回の一結果をみると、次のことが考えられる。

母子関係を支える背景として、今回の障害をもつ児の母親の要望、期待にもあげられているように、夫(父親)の育児への参加は大切である。そのような意味から教育的働きかけとして、未来の父親、夫への豊かな育児観、育児意識の昂揚および表11にみられた大学生の障害児の育児に対する前向きな姿勢に好機として啓蒙し期待したいと考える。

#### 〔結語〕

1. 診断名の告げられた時期について、今回の対象がとくに障害児専門の施設のため、相当早期に診断されている。しかしなお、できるだけ早期に診断を望む意見が多かった。結婚、妊娠以前に障害に関する知識を有していたことで、早期に異常に気づいた、診断への受けとめが容易であったと述べている者がみられた。

2. 児が母親を他者と区別できた時期、母子

間の精神交流の時期等は、相当早期から確立されているように見受けられた。

3. 母子間の精神交流は、その時期にいくつかのピークが見られるようであるが、母親は、交流は成立している意識に立っている。しかし、母親の主観性が強いと思われるので信憑性には疑問もある。

4. 主に種々の程度の脳性まひ児と精神発達遅滞児が対象であるが、日常の様子を健康状態、機嫌、ほほえみでみると、母親が育児するためには、おおむね満足できる状態と考えられる。ある程度の育児の結果としての母親の満足感も推察できる。

5. 育児目標ならびに児の成長のとらえ方についてみたが、この結果は、健常児のものとの比較検討が必要である。

6. 児が一番して欲しいこと、母親が児が一番してあげたいことについてみると、児の欲求は心にとめておいてはいても、児の機能の進展の可能性を求める育児姿勢がみられる。

7. 育児上の負担については、障害による生活の困難への対応に関するものが多くあげられている。援助の要求内容については、手助けする人を求める願望が多くあげられている。

8. 子どもの受け入れに関して、妊娠中の障害児診断の利用についての回答は、半数の者が生むか否かの判断に活用する、であり、1/4の者が育児への対応のために、としている。

9. 障害児を育児する姿勢は、障害児の育児体験を経た母親には、親の手もとで育てるといふ意志がかたまっているようである。

今回は、対象を一施設にしぼり、その特色の中で得た結果であることをふまえ、以後は障害の程度、施設の種類等、対象の範囲をひろげて検討する必要があると考える。

表1 障害児の出生順

	人数(%)
第1子	35(56.4)
第2子	21(33.9)
第3子	5(8.1)
第4子	1(1.6)
計	62(100.0)

表2 診断名を告げられた時期

	人数(%)
1歳未満	15(24.2)
1歳	31(50.0)
2歳	12(19.4)
3歳	2(3.2)
4歳	2(3.2)
計	62(100.0)

表3 障害児の日常の様子 (%)

	とても良い	まあ良い	あまり良くない	全然良くない
健康状態	4(6.5)	34(54.8)	19(30.6)	3(4.8)
興味	22(35.5)	33(53.2)	6(9.7)	0(0.0)

	とても良くほほえむ	時々ほほえむ	あまりほほえまない	全然ほほえまない
ほほえみ	50(80.6)	10(16.1)	1(1.6)	1(1.6)

表4 母親がとらえる児の成長

1位	表情が豊かになってきた
2位	体重や身長が増大する
3位	自らの気持ちや考えている事を表現することが上手になってきた
4位	興味を示すことが増えてきた
5位	行動の範囲がひろがってきた
6位	動きや姿勢が良くなってきた
7位	言葉が進歩した

表5 育児の目標

1位	子どもの毎日が幸せであるように
2位	健康が保たれるように
3位	少しでも良くなるように
4位	人並みにしたい(なってもらいたい)
5位	子どもと楽しくつきあいたい
6位	子ども理解したい
7位	とにかく生きていて欲しい

表6-1 児が母親を区別した時期, 母親が児をかわいいと実感した時期 表6-2

	母親を区別	かわいいと実感
1歳	49(79.0)	53(85.6)
2歳	7(11.3)	6(9.6)
3歳	4(6.4)	3(4.8)
4歳	2(3.2)	0(0.0)

1歳まで	・人見知り ・後追い ・母親のみに反応
2~3歳頃	・母親のみに反応 ・母親のみに能動的な意志表示
3~4歳頃	・母親のみに能動的な意志表示

表7 気持ちの交流の感じ方 (%)

	児に伝わっている	児から伝わる
あり	47 (75.8)	46 (74.2)
なし	1 (1.6)	0 (0.0)
わからない	10 (16.1)	5 (8.1)
無回答	4 (6.5)	11 (17.7)

表8 気持ちの交流の見られた時期 (%)

	児に伝わる	児から伝わる
3ヶ月から4ヶ月まで	20 (32.3)	19 (30.7)
5ヶ月から1歳まで	2 (3.2)	5 (8.1)
1歳から2歳まで	13 (21.0)	11 (17.7)
2歳から3歳まで	2 (3.2)	3 (4.8)
3歳から4歳まで	5 (8.1)	7 (11.3)
無回答	20 (32.3)	17 (27.4)

表9 児がして欲しいこと、母がしてあげたいこと 人数

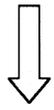
児が一番してあげたいこと		母が一番して欲しいこと	
機能の進展	20	一緒に遊んで欲しい	24
快い気持ちに	15	快い気持ちに	17
一緒に遊んであげたい	13	望ましい環境を	4
望ましい環境を	3	機能の進展	2
わからない	1	わからない	2

表10 胎児のチェックが可能

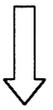
	障害児の母親	大学生・男性	大学生・女性
生むか中絶するかを決めるため	48.4 %	48.6 %	49.5 %
障害児に対応するため	24.2 %	26.1 %	30.4 %
利用しない	19.3 %	25.3 %	20.2 %
無回答	8.1 %	0.0 %	0.0 %

表11 障害児が生まれたら

	障害児の母親		大学生	
	出現前の考え	出現後の考え	男性	女性
親の手もとで育てる	40.3 %	62.9 %	40.9 %	24.4 %
施設へ入れる	25.8 %	19.4 %	13.2 %	18.2 %
その他	11.3 %	11.3 %	0.0 %	0.0 %
通園施設へ通わせる	0.0 %	0.0 %	45.8 %	57.4 %
無回答	22.6 %	6.5 %	0.0 %	0.0 %



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔目的〕

障害をもつ子どもの母親と、障害をもたない子どもの母親の育児意識や育児観などを調査し・青年の親準備教育との関連のなかに生かしていきたい。